

ては募集区画の10倍に及ぶ応募があるが、地域の需給バランスの結果、高倍率になるため、05年度の平均は1・2倍の応募者がある。

日帰り型市民農園は宿泊施設はなく、自宅の生活圏内で「農」のある暮らしを楽しむライフスタイルである。この点は後述するドイツの「クラインガルテン」に近いといえる。

練馬区の場合、市民農園とは別に有料で農業指導を行ない、八百屋の店頭と並ぶ品質レベルの農業体験ができるプログラムもある。年3万1000円の入園料を払う。農作業体験を通じて体験者はコミュニティ化し、毎年継続して受ける人がほとんどで5年間経つと卒業となる。募集はその補充を行なうときだけなので、その際の応募率は06年で定員の2・8倍に達するという。農業体験農園は、都市住民と農業者の交流、農家による懇切な農芸指導という点に特色があり、農業経営として成り立つ農園、民間の創意と活力が活かされることを狙いとしている。

いずれにしても「農」のある暮らしに対する都市住民のニーズは確かなものがある。

滞在型市民農園

わが国ではクラインガルテンという

と、長野県松本市の「四賀クラインガルテン」や茨城県笠間市が有名で、滞在型市民農園を指す。先述の農林水産省農村振興局農村政策課都市農業・地域交流室都市農業班のデータによれば、施設数は全国で55あり、区画数は3686区画、合計面積は101haに及ぶ。関東エリアで5割を占めている点特徴的である。

わが国でクラインガルテンの先駆けとなったのは長野県四賀村（現・松本市）の四賀クラインガルテン。旧四賀村で、休耕地を利用して都市部との交流を目的に建設された。このクラインガルテンは坊主山と緑が丘の二つの地区に分かれており、ラウベ（宿泊施設）付きの農園は131区画あり、ラウベは27×30㎡、各区画の敷地面積は270㎡ある。地元の農家が各契約者ごとに個別にボランティアで「田舎の親戚」となり、野菜づくりや収穫の時期などのアドバイスを受けながら家庭菜園を楽しむことができる。利用は初年度10万円と年間利用料10万÷39万円で年間契約を行ない、更新は年1回、最大4回まで更新ができる。

利用にあたっては条件がいくつかあり、花・野菜づくりを有機農法で行なう、冬季期間を除きクラインガルテンを1か月に3泊ないし6日以上利用し、草取りなどの必要な手入れを行な

中村千春 (ながむらちる)

● 株式会社総合研究所 研究事業本部 主任研究員
1950年生まれ。中央大学法学部卒業。同大学院修士課程修了。企業コンサルティング歴20年（新規事業開発、多角化、新製品開発、マーケティング戦略、集客戦略その他開発系テーマのコンサルを多く実施）、新規事業セミナー、ニュービジネス研究会、その他外部講演・セミナー・シンポジウム多数。著書に「集客革命」(PHP研究所)がある。ほか雑誌寄稿多数。
nakamura.chihiro@nrc.co.jp

矢野 勝彦 (やのかつひこ)

● 株式会社総合研究所 研究事業本部 主任研究員
1965年生まれ。東京大学法学部卒業。生活サービス産業創出・事業化支援、地域再生コンサルティング・事業化支援、専門分野は生活・福祉（シニアビジネス）、観光・集客、交通・住宅など（今年4月から「回塊」2007年問題）ビジネスチーム（を組織）講演・セミナー・シンポジウム、雑誌寄稿など多数。
yano.katsuhiko@nrc.co.jp

う、クラインガルテンでの必要な日用品・資材などは地区内で調達する、区画の美しい庭づくりを積極的に行なう、地域の交流事業に参加する、信州松本・四賀クラインガルテン倶楽部憲章を遵守すること、などである。別荘目的での利用は認められない。

申込者が多く抽選になるほどの人気で、契約更新で訪れた人が地元不動産物件を気に入り定住するケースがあるというから、過疎地に人を誘致する仕掛けとしては有効に機能しているといえよう。

ドイツの「クラインガルテン」

クラインガルテンとは、ドイツ語で「小さな庭」という意味で、自宅から徒歩15分以内にクラブハウスを備えた敷地のことである。もとはイギリスで労働者の救済対策として行なわれていたものがドイツに渡り、産業革命の影響による都市化に伴う生活環境の悪化から、子どもたちの健康に配慮した遊び場としてつくられた。ワイマール時代の1919年にクラインガルテン法が制定され、クラインガルテンの計画がすでに都市計画として整備されていた。第2次世界大戦中には食糧自給目的もあり多くのクラインガルテンが

市町村有として永久的緑地となった。90年の東西統合により、ドイツ国内のクラインガルテンは110万区画以上となったが、旧東ドイツ地域のインフラ整備に多額の費用が必要となり、新しいクラインガルテンの開設や老朽化したクラインガルテンの再整備などは後回しとなった。かつ旧東ドイツ地域における農業生産や市民所得の向上、野菜流通の整備などが進み、食べるためにクラインガルテンを所有する人々のクラインガルテン離れが起こり、02年には110万区画を下回り、いまも減少傾向が続いている。とはいえ、旧西ドイツ地域のミュンヘン市などの大都市では、わずかながら増加傾向となっている。

東西ドイツ統合からEU統合と社会情勢が激動するなか、クラインガルテンは21世紀もドイツ市民に対し新たな役割を果たしつつ、地域社会になくはならないものとして機能していくであろう。

日本クラインガルテン協会の資料によれば、ドイツのクラインガルテンには次のようないくつかの特徴がある。

- ① 1区画の面積が平均約300㎡
- ② 面積24㎡以下で平屋の小屋（ラウベⅡ宿泊施設）があるが、原則として宿泊は禁止。電気、電話は配備されていない

- ③ クラブハウスを付帯。クラインガルテナーが共同で建設する
- ④ 賃貸期間は25年あるいは無期限。配偶者以外にその権利は譲渡不可
- ⑤ 利用者による自主管理運営
- ⑥ 公共の場
- ⑦ 利用料金が年間3万円前後（ラウベは個人資産）
- ⑧ 利用者は集合住宅の2階以上に住む人に限定



ロシア・ダーチャの風景

(荻野恭子氏のホームページ <http://www.cook-ogino.jp/> より)

1区画の平均的な広さは600㎡。ロシアは国土が広いので、シベリアサイドのダーチャは自宅から車で15～30分の距離にある

ロシアの「ダーチャ」

- ⑨ 居住地のクラインガルテンしか利用できない
 - ⑩ 農薬や肥料の使用が制限
- 以上のように、ドイツのクラインガルテンは日本のクラインガルテンとは異なった特徴があり、都市計画の一環として位置づけられている。とりわけ大きな特徴は、高層住宅の生活者のために居住エリア内で菜園を楽しむ点である。

ロシアというと、われわれのイメージは経済危機で生活が疲弊し、「二地域居住的」ライフスタイルどころではないという先入観をもつてしまいがちだ。しかし、ダーチャを実際に見聞した料理研究家・フードコーディネーターの荻野恭子氏によれば、このダーチャのライフスタイルはロシアの国民全般に広まっていて、人々の生活に密着しているようだ。5～10月の温暖な季節になると人々は毎週ダーチャに向かい、自分のつくった料理を自慢しあう。移動も車で、週末は渋滞を起こすほど多くの人々が自分のダーチャに向かう。年金生活者はバスが無料で利用でき、ヒッチハイクや乗り合いで行く人もいるという。

『現代農業』臨時増刊号 団塊の帰農

03年11月「菜園コテージで生き抜く：危機の産物『ダーチャ』ロシア見聞録」佐藤誠氏著（社農山漁村文化協会刊）によれば、ロシアでは現在50種類以上のダーチャの雑誌が出されており、毎月100ページ、2000ものダーチャ物件が写真入りでかつドル建てで紹介されているという。ダーチャは決して富裕層だけのライフスタイルではなく、退職者や年金生活者も楽しめ、大多数のロシア国民がこのライフスタイルを謳歌しているようだ。

ドイツの「クラインガルテン」は、わが国という市民農園に近い。二地域居住のように地域への人の移動・滞在という点では、ロシアのダーチャのほうが日本のクラインガルテンに近いように思われる。実際に現地を知る前出の荻野恭子氏のホームページでは、その実態が鮮明に紹介されている。

「ダーチャはロシアの菜園付き別荘のことで、日本の別荘とは異なります。ロシア国民の6割ぐらいの人々がダーチャを持っており最近では、一年中生活が可能なレジャー目的の高級ダーチャも出現しています。ダーチャは郊外（都心から20～100km）に土地を購入したり、借用して手りの木造小屋を建て、そこで農作業をしたり、宿泊して楽しみます」。

「週末には、ダーチャのラッシュがある」

り、通常1時間ぐらいの距離が3時間ぐらいかかる事があります。……中略……菜園では野菜や果物を育て、また、スペースがあればバーニヤというサウナ小屋を作り、野良仕事で疲れた体を休めます。疲れを取る為に、白樺の葉が付いた小枝で体をたたいて血行を良くします。ロシアでバーニヤは人気のあるリラックス方法なのです。春の雪解け時期を待つて、ロシアの人達は、週末、苗を持ってダーチャへ車で出かれます。そして、土を耕し、苗を植え、短い夏の間野菜や果物を作り、収穫し、長い冬に備えて保存食を準備します。その保存食を上手に利用して、サラダやスープや煮込み料理を作りまします。自然の味は思わず「オーチンフクスナー！ 大変美味しい！」と口ずさんでしまうほどです。また近くに川や湖があれば釣りや水遊びを、森や林があれば、キノコ狩りやベリー摘みをして楽しんでいます」。

4 タイプの比較

以上にみてきた4つのタイプを比較して表にすると図表2のようになる。それぞれのタイプはその背景となる事情とともに今日の姿となっており、ライフスタイルの一環として定着している。

【図表2】4つのタイプ比較

比較項目	市民農園 (日本)	滞在型市民農園 クラインガルテン (日本)	クラインガルテン (ドイツ)	ダーチャ (ロシア)
自宅からの距離	徒歩15分～数十km	数十km～百数十km	徒歩15分程度	20km～100km
宿泊施設機能	なし	あり	なし	あり
運営	地方公共団体	地方公共団体	協会	個人?
所有・賃貸	賃貸	賃貸(建物・土地)	土地は賃貸、 小屋は所有	地方公共の組織 (ダーチャ協会、 園芸家組合など)
件数・区画数	3,214か所 15万6,718区画	55か所 3,686区画	110万区画弱	数千万区画 (推定)

今後検討しなければならないのは、「二地域居住的」ライフスタイルとして国民にもっと広く浸透できるか否かという点だろう。自宅の生活圏にある市民農園は大都市の場合、練馬区のように農地が住宅地と混在しているように限られたエリアで可能である。

都会からある程度距離が離れた農地のあるエリアに通いながら、「農」ある生活を楽しむことは可能だ。しかし地域の側からすれば日帰りて来て農作業をして帰ってしまう市民農園はたして意味があるかという議論があり、むしろ滞在型のほうが地域住民との交流機会があり地域での経済活動も期待できる。しかし一方で、1棟数百万円

もするラウベのイニシャルコストに対して20万～40万円/年の賃料では採算ベースには乗らないため、ビジネスとして広がりを見せにくいことは考えにくい。わが国のクラインガルテンモデルでは財政的にも限界があるだろう。地域資源の提供によるセルフビルド村構想は本誌06年12月号で紹介したので省略するが、「二地域居住的」ライフスタイルのボトルネックになるのが住居費と交通費である点からみると、ドイツやロシアのように小屋を自ら建てるというライフスタイルは大いに見習うべきであろう。

地域食文化の 発掘・深耕

わが国のクラインガルテンは人口減少、農家の担い手不足に悩む地域への人の誘致策として行政が取り組んでいるものだが、はたしてドイツのクラインガルテン、ロシアのダーチャのように生活に根づいたライフスタイルとして、国民の間に普及浸透していくかという点とまだまだ不透明である。団塊世代が定年退職をはじめ07年にはや突入しており、田舎暮らしを準備している団塊世代も多いと聞く。しかし二地域居住人口が現在の100万人から

10倍の1000万人に至るという予測についてはしばしばふれられてきたが、クラインガルテンや市民農園の施策でどこまで実現できるであろうか。地域への人の誘致は、ハコモノ系インフラの整備以外に、ソフトアプローチの仕掛けが伴わなければならないだろう。それは二地域居住的なライフスタイルそのものが楽しく満足度の高い内容にしていくなための仕掛けで、たとえば地域食文化の発掘・深耕のプログラムがそれで、二地域居住的ライフスタイルの生活文脈のなかにこれを組み入れ、地域の食文化にふれる機会をふやしていくことであろう。

都市と農村の交流プログラムのなかで、おそらく最も取り組みやすく普及していく可能性が高いのは「食」の交流であろう。地域には昔から培われてきた食文化が豊富にあり、地域の人の交流を通じてその魅力を再発見するということはわれわれの経験のなかにも多くありうる。二地域居住し、半定住・移住暮らしをするうえで「農」ある暮らしは、地域食文化の発掘・深耕をプログラムとして充実させていくことにより、さらに楽しさを増していく。観光の世界と異なり、「二地域居住的」ライフスタイルで地域とふれあう意味はこの点にあるといっても過言ではない。